

## はじめに

1972年、原爆医学資料センター・2部門のひとつとして出発した病理部も、20年目の佳節を迎えようとしています。当初の「原爆医学資料センター」から、1974年に「原爆被災学術資料センター」と改称されて以来、その業務と研究内容も単なる《資料収集》から放射線障害の医学的学術研究を加えた内容へと変わってきたといえます。すなわち、①急性原爆症例の収集と整理、②米国返還資料の保存と整理、③原爆被爆者手術症例の収集と整理、④原爆被爆者剖検例の収集と整理等に加えて、⑤被爆者における疾患特異性の病理組織学的検討を行なってきました。特に人体材料を中心に研究を行い、疾患特異性としての各種癌の病理組織学的研究と、ここ数年は老化の問題も取りあげようと試みてきました。

良く知られていることですが、ここ数年来被爆者の高齢化が顕著となり、あるいは国内的にも国際的にも高齢化社会の到来に伴う社会的なニーズともあいまって、1987年より当資料センター病理部でもヒューマンに加えて動物実験による老化研究をスタートさせました。当センター病理部での老化研究はまだ始まったばかりですが、これからは模索しながらも出来るだけヒューマンへ還元出来る研究を目指してまいりたいと考えています。

長崎という地方大学にあって、地域の特徴を生かしつつ社会のニーズに応えるべき研究の進展を願い、今回は「小規模グループとしての老化研究の発展を目指して」とのテーマのもと病理部でセミナーを計画致しました。ご講演を快くお引き受けいただきました先生方は、各々の専門分野の第一線で特筆すべきご活躍をなさっておられる先生ばかりで、極めてご多忙な中でのご来崎を賜りました。心より感謝申し上げるしだいです。

老化の研究はその方法も種々であることは勿論ですが、その老化の尺度をめぐってはコンセンサスを得られている部分が少ない研究分野のひとつとも言えます。そこで、本日は研究歴が浅く未熟である事を承知の上で、当資料センター病理部の老化研究の現状をまず報告させていただき、ご批判を頂戴したいと考えております。ご講演の先生方や、ご出席の先生方のお話をレコメンデーションと受けとめ、今後の当センター病理における老化研究の一つの方向性と、研究の今後の発展を目指してまいりたいと考えております。

演者と参加者全員が肩の凝らない、しかもクリティカルなディスカッションの場を持つことが出来、更には出席者の先生方同士が共同研究を計画出来るまで打ち解けた意見交換の場が持てれば望外の喜びです。